

#4

主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。
(ヨハネ 13・14)



人のために生きる

使徒ヨハネは、死を目前にしたイエスが、弟子たちと最後の数時間を共に過ごした際に彼らの足を洗った場面を鮮明に描いています。

砂漠地帯の中東では、砂ぼこりの道をやってきた旅人の足を洗うことが、もてなしのしるしでした。それは通常しもべの仕事でした。

イエスの呼びかけは、とても単純明快です。たとえどんな状況にあっても、誰もが理解し、どのような社会や文化的背景の中でも、すぐに実行できることです。

イエスの生き方と言葉を通して、神さまの愛を知った私たちキリスト者は、他の人たちに「借り」があると言えます。

なぜなら、キリスト者は**イエス**にならって、**兄弟たちを受け入れ**、仕え、神の愛を伝える者として呼ばれているからです。

イエスがしたように、まず具体的に愛して、その行動に、希望の言葉、友情の言葉を添えるのです。



とてつもなく複雑な問題や、悲惨な状況に直面したとしても、社会の「善」に貢献するために、できること、すべきことは何かあるでしょう。

見返りを求めず、惜しみない心で、責任をもって、行動に移してみましよう。



今月のみ言葉を、
どのように生きて、
よいでしょうか？



キアラ・ルービック
はこう言っています

「イエスにならうとは、イエスの行動を文字通りに見習うという意味ではないでしょう。もちろん、弟子の足を洗うというイエスの行為は、最高のお手本として心にとめておくべきです。

私たちキリスト者は、**他の人の『ために』**生きること初めて、その**存在意義が生まれます。**

これを理解することが、イエスにならうということです。私たちは兄弟姉妹に仕えるために存在します。これを人生の基盤とするなら、イエスが最も大切にしていること、福音の最大のメッセージを理解することになるでしょう。そして本当の幸せを見つけるでしょう。」¹



僕らの経験:

イタリアより

大晦日を祝うために、友達の家に行きました。ゲームしたり映画見たり、ごはん食べたりでかなりはしゃぎました。そのうち、家の中はかなりめちゃくちゃになっていました。

友達はみんな、気にも留めていない様子で、誰も片付けを手伝う気はなさそうだったので、僕から始めました



仲間の一人は、羽目を外して、ちょっと飲みすぎてしまい、介抱が必要になってしまいました。

すぐに後始末を手伝ってあげて、手持ちのセーターを貸してあげ、汚れたところをガマンしながら、できるだけきれいにしました。

ちりとりと雑巾で床を掃除していると、誰かがそばに来て言いました。「**何でそこまでやるの？誰かがやってくれるからいいじゃん。**」

僕はすかさず、はつきり言いました。自分はクリスチャンだからそうするし、それをいつも証しするようにしている、と。

「何も信じてない」とはつきり言っている子が9割いる中で、僕はその瞬間、自分自身に満足しました。心に平和があって、大きな喜びを感じました。自分**のクリスチャンとして**の生き方、愛である神様を選んで生きていることを証しできた喜びでした。

¹ キアラ・ルービック
1982年4月のいのちの言葉